

洞富雄先生のご逝去を悼む

由井正臣



本学元教授洞富雄先生は、二〇〇〇年三月一五日に心不全のためお亡くなりになりました。享年九三歳。

先生は一九〇六（明治三九）年十一月十四日、長野県東筑摩郡本城村に生まれ、県立松本中学に進学、大杉栄とクロポトキンの影響を受けて社会学研究を志し、早稲田大学付属第一高等学院に入学、一九三一（昭和六）年三月に同大学文学部史学科国史専攻を卒業されました。この間、西村真次教授の薫陶をうけ、学問の基礎を築きました。

大学卒業の年、早稲田大学付属図書館に書記として採用され、主として「伝記」、「地理」、「教育」などの分類目録の編刊にたずさわりました。その傍ら研究に励まれ、一九三九（昭和一四）年には処女著作『鉄砲伝来記』を出版されましたが、このテーマはその後の先生の終生の課題の一つとなります。また一九三七年以降は文学部講師を兼任され、土俗学、国史概論などを講じました。太平洋戦争講師を兼任され、独居の状態で図書館業務と研究・教育に全力を傾注され、再び家族団欒の日を迎えたのは十年後の一九五四年であったといわれます。

先生が専任助教授として文学部に迎えられたのは、一九五七（昭和三二）年であります。その三年後の一九六〇年、先生は処女著作をさらに精緻化した『鉄砲伝来とその影響』（一九五九年刊）を主論文に、『新版・日本母権制社会の成立』（同

年刊)を副論文として、文学博士の学位を受けました。同年、早大図書館の副館長となられ、和漢の貴重書の収集に尽力するとともに、大隈文書、極東国際軍事裁判記録の整理など、大学図書館の充実に大きな役割を果たしました。他方、一九六一年には教授に昇進され、第二文学部東洋文化専修主任、第一文学部日本史専修主任、大学院文学研究科史学(日本史)専攻連絡委員などを努められ、数多くの優れた後進を育成されました。一九七七(昭和五二)年三月、七〇歳で定年退職されました。

退職後の先生は壮者を凌ぐ勢いで研究に専念され、次々と著作を世に問われました。先生が生涯にわたって出版された著書は二〇冊を越え、その仕事は多方面にわたっています。第一は、『天皇不親政の起源』をはじめとする古代天皇制研究であり、第二は、『日本母権制社会の成立』や『庶民家族の歴史像』などの家族史研究であり、『名無しの権兵衛』にも名前があった』という近世庶民世界へのユニークな研究も含まれます。第三は、学位論文を中心とする鉄砲研究です。第四は、『樺太史研究―唐太と山丹―』、『間宮林蔵』など北方領土問題の歴史研究です。第五は、幕末外交関係資料の収集・整理のうゑにまとめられた『幕末維新の外圧と抵抗』を中心とする研究です。そして第六が、晩年の先生が心血を注がれた南京大虐殺の研究を中心とする近代戦争史の研究であります。

先生の学問を通観したとき、権力者よりも民衆へ、中央よりも周縁に歴史家としての眼が注がれていることに気づかされます。その研究態度は、細部をゆるがせにしない、もつといえはあくまで細部にこだわりのながら、大きく全体を把握しようとするものでした。それだけに、先生はつねに新しい資料、新しい研究を批判的に検討し、摂取しながら、先述の各テーマの研究を深められました。その意味で、先生の研究はつねに生成発展するものとして、色あせることなく私たちの眼前にあります。

先生は事実を無視し、歴史を歪曲するものに対して、調べぬいた証拠と論理をもってきびしく批判し、説得に力を尽くされました。南京大虐殺を否定する「まぼろし派」イデオロギーへの批判は、晩年の先生から多くの時間と労力を奪いました。が、先生の理性的批判は死にいたるまでつづけられました。これらは先生の歴史家としての学問的責任感と、人間としての良心を証だてるものであります。

心から、先生のご冥福をお祈りいたします。